

以下、倉俣監督ブログ「ボーイズリーグ」等から抜粋

ボーイズリーグの目的

正しい野球のあり方を指導し、野球を通じて心身の錬磨とスポーツマンシップを理解させることに努め、規律を重んじる明朗な社会人としての基礎を養成し、次代を担う少年の健全育成を図ること。

この目的にそって、次のような事業を遂行。

1. 少年野球の振興、指導、加盟団体への監督
2. 少年に適した野球の調査、研究、普及
3. 国内大会の開催及び後援
4. 国際大会、国際親善試合の開催と選手の派遣
5. 指導者、審判員の養成及び講習会の開催
6. その他この連盟の目的達成に必要な事業

一方、ボーイズリーグなど硬式野球を希望する子どもたちの夢の多くは、`甲子園に出たい、`プロ野球選手になりたい、の2つ。学童野球時代と同じ夢を持ち続けています。その甲子園。明後日から始まるセンバツでは、出場チーム32校中24校でボーイズリーグ出身の選手がベンチイン予定。優勝候補の智弁学園（奈良）には10名。その他多い高校は、大阪桐蔭13名、健大高崎13名、早稲11名、履正社10名、愛工大名電10名、敦賀気比10名、天理9名、鳥取城北9名など、ベンチイン18名中半数を超える学校は9校を数えます。また、子どもたちの更なる夢としては、`プロ野球選手になりたい、`。2012年3月30日に開幕するプロ野球には昨年より6名増え、180名（12球団840名中）が所属。海の向こう大リーグにも4名（ヤンキース黒田投手、レンジャーズ建山投手、ダルビッシュ投手、ホワイトソックス福留選手）が活躍。ボーイズリーグは、`実績、`という面でも、子どもの夢を叶える選択肢の一つと判断して間違いのないようです（笑顔）。

一方、マイナス面も…。私が知る限りの課題をいくつか挙げてみます。

1. 親の経済的・時間的な負担がかかる。
 2. 学業が疎かになっている選手も多い。
 3. 学校の部活と違い、学校では評価されにくい。
- などです。

1に関して、経済的な負担に関してはどのチームも毎月1万円程度の部費が発生しています。親の送迎やチーム運営・大会運営等保護者の方々の協力が不可欠となります。

2に関して、学業もそうですが、素行面の問題もちらほら耳にすることがあります。やはり、少年の健全育成では、学業、学校生活とスポーツ活動を切り離して考えるべきではありません。

3に関しては、リトルシニアさんも含め、40年以上に及ぶ歴史の中で、`実績、`という形で徐々に改善されてきました。

高崎ジャイアンツボーイズは、今年誕生10年を迎えました。私がボーイズリーグや硬式野球にこだわる理由は2つ。一つは、指導者のレベル、志す子どもたちのレベルが高いから。やはり一芸を極めた人たちとの語らひは楽しいし、勉強になります。もう一つは、早熟の子も晩熟の子も、18歳、20歳、22歳という人生の進路を決める段階で、野球を通じて夢に近づけ

ていると感じています。そのような意味で、経済的・時間的、学業・学校生活との両立を図る気持ちがあるなら、ボーイズリーグは選択肢の一つとしてお勧めできます。そのなかで、高崎ジャイアンツボーイズも名門と呼ばれるにはまだまだ時間が必要ですが、プロ野球選手を目指したり、国公立大学に進学して指導者になりたいという中学生には良いプログラムを提供できると思います。

OBからのアドバイス

高崎ジャイアンツOBの山口諒祐さん（前橋育英高校→東北福祉大学硬式野球部4年）が就職が決まったと挨拶に来てくれました。卒業後は東京に就職。実軟の強豪チームでプレーを続けるそうです。中学時代は運動能力抜群。日本代表として中国遠征に行ったことなど、懐かしく語らいひと時を過ごしました。東北福祉大学は、仙台六大学に所属、春・秋季リーグ30連勝中。全日本優勝2回。阪神金本選手などプロ球界にも多くの人材を輩出している言わずと知れた名門。そんな野球部で4年間を過ごした山口さんの中学生へのアドバイスとは…。

1. 当たり前かもしれないが、挨拶など基本がしっかりできる人が大学でも伸びる。
2. 何か一つでも長所があることが大切。それを伸ばすことで注目してもらえる。
3. 体のケアを怠らない。

心構え

①理不尽

野球はとかく理不尽。監督が白と言え、黒でも白。そんな世界。叱られてシュンと凹んだり、へそを曲げたりすると、監督はその態度を見逃さない。監督としては、`叱りづらい選手`のレッテルを貼ることに…。どんどん会話が少なくなり教えたことも教えられない…。叱られるうちが花。叱られることは期待されていることの証。`叱られ上手になることが上達の秘訣`、というものです。また、石山先生は、教え子でもあるオリックスの岡田監督を宮古島キャンプに訪問した際、対談の中で、岡田監督がプロで伸びる選手の条件として`その選手のお師匠さんは誰か？`が非常に大切、という話を披露してくれました。プロで長く活躍できる選手を輩出する学校の監督さんは、技術だけでなく人間力も鍛えてくれるというものです。

②鈍感力

大リーグでパイオニアとして活躍した野茂英雄さん（43歳）は、大リーグ挑戦6年目にして初めて日本の硬球よりアメリカの硬球の方が若干大きく重いことを発見…。また、社会人時代石山先生は全日本の監督としてキューバに遠征。そのとき21歳の野茂投手は、電球がつけっぱなし、扇風機がガンガン音を立てて回るむさ苦しい大部屋でも一人いびきをかいて熟睡。こんな`鈍感力`が成功の秘訣と披露。細かいことをいちいち気にしては大成しないという例え話です。保護者の方々にとっては、硬式野球と軟式野球の選択、チームの選択等色々考えることが多かったと思います。その中でも、あまり硬式野球やボーイズリーグそのものに詳しくない方が多いのも事実。この場を借りて簡単に補足させていただきます。ボーイズリーグ（正式名称：日本少年野球連盟）は、日本に7団体（リトルシニア、ヤング、ポニー、サン、フレッシュ、ジャパン）ある硬式野球連盟の一つ。1970年にスタートし現在は全国に677チームが加盟。約2万人の小中学生が所属しています。